

金天鶴氏の発表論文に対するコメント

王 頌*
(中国 北京大学)

法上の『十地論義疏』(以下『義疏』)は、『十地經論』に対して中国で編纂された注釈の中で、比較的早期のものです。ただ、残念ながらその内容のほとんどが失われており、研究はあまり進んでおりませんでした⁽¹⁾。このような状況下において、金天鶴先生の今回のご発表は、この研究分野を切り開く意義を有しています。金先生のご発表は、『十地經論』の「加分」に対する注疏において、“三種尽”・“障”に関する注釈が如何なる特徴を有しているかという、従来それほど注目されて来なかったことについて考察し、更に『大乘五門実相論』や地論宗の敦煌写本と比較することにより、それらの影響関係を示しています。その意義は、まさに金先生が、「さらに小稿を通して『義疏』だけでなく、包括的には地論学派の思想研究を、より進展させるところに目的がある」とおっしゃっている通りです。金先生を中心とする金剛大学仏教文化研究所が地論宗の研究において成し遂げた成果は万人に認められており、また、学界に対する貢献は万人に称えられています。私はこのように存じておりましたので、この度、金先生のご発表を拝読し、そのコメントを担当することとなり、非常に光栄に感じております。この場をお借りして、特に金先生と大会を主催して下さいました方々に、お礼を申し上げさせて頂きたく存じます。ここでは、金先生のご意向と、及び日中韓三箇国の学者同士を積極的に交流させようとする本会議の趣旨に対して、よりふさわしく応じるために、私は、金先生のご発表内容を大まかに振り返ってコメントするとともに、関連する原典に対する私自身の理解をも交えて、簡単ながら管見を述べさせて頂きたく存じます。準備が足りず、考えもまだまだ浅はかではございますが、及ばぬところについて、金先生ならびに皆様方のご批正を賜りたく存じます。

私がお話したい中心の問題は、法上の「三尽」・「三障」説の特徴は結局

*北京大学哲学宗教学系副教授。

のところ何なのか、ということでございます。この問題についてご説明するためには、金先生の示された内容以外に、もう少しその他の重要人物がこの問題についてどのような論述をなしたかということについて補足し、それによって比較研究する必要があるかと存じます。

—

まず、三尽・三障の含意について見てみましょう。三種の尽とは、菩薩尽・声聞辟支仏不同尽・仏尽を指し、それに対応する三種の障は同相障・異相障・体障です。金先生が指摘なさっているように、ここにおける三障の名称は非常に特殊であり、他の典籍に同様の用例は見られません。それでは、「三尽」は、どこから出てきたものなのでしょうか。確実に言えるのは、『十地経論』に由来し、決して法上の発明ではないということです。

『十地経論』は、『十地経』「加分」の一段について、ある解釈をなしています。まず、以下はその経文です⁽²⁾。

復次善男子、汝當辯說此諸法門差別方便法故、承諸佛神力如來智明加故、自善根清淨故、法界淨故、饒益眾生界故、法身・智身故、正受一切佛位故、得一切世間最高大身故、過一切世間道故、出世間法道清淨故、得一切智人智滿足故。

そして、以下は、それについての論です。

是身淨中顯三種盡。一者、菩薩盡、有二種利益。二者、聲聞辟支佛不同盡。三者、佛盡。

菩薩盡者、法身離心・意・識、唯智依止、如經「法身・智身」故。二種利益者、現報利益、受佛位故、後報利益、摩醯首羅智處生故、如經「正受一切佛位故」、「得一切世間最高大身故」。二乘不同盡者、度五道復涅槃道淨故、如經「過一切世間道故」、「出世間法道清淨故」。佛盡者、入一切智智滿足故、如經「得一切智人智滿足故」。

この段の述べることは、はっきりしています。「菩薩盡」というのは、分別の意識から離れることにより、平等にして分別智の無い境地に留ま

り、現報・後報という二種の利益を得られる、ということです。「二乗不同盡」というのは、出離道・解脱道・出世間道です。『論』の説明は簡略なのですが、『經』および『論』の前後の文から考えてみると、「不同」というのは、菩薩乗の出世間清浄道と二乗との間に差異があることを強調しているのでしょう。そして、「佛盡」とは、一切智智に証入し、仏となることを指しております。

法上『義疏』は、この段の經文について、次のように解釈しています。

菩薩盡者、因道究竟、八地已上。同相障者、初地已上・七地已來、所有法界海會菩薩同名菩薩、名為同相。正以多相故、障於報身、不顯無功用智。超功用智盡、相融無礙、成於報佛也。

二乗不同盡者、初地至七地、不同相障盡。言不同者、地前菩薩見聲聞相異菩薩相、見菩薩相異佛相、是名異相障。由此別相障故、不能見應身佛。初地已上斷四住煩惱盡則不同障盡。

佛盡者、果徳圓備、體障盡。……正以緣智在懷、一佛體上分別作無量佛解、以是故、障法身不顯。

これらのことから、「三盡」というものに対する法上の解釈が『十地經論』に由来することが分かりますが、ただその内容はより豊富であり、また彼自身の考えを展開してもあります。第一には、「三障」という概念を引いてきているために、その「三盡」についての説明は、『論』とは重点が異なります。第二に、「三盡」それぞれが十地のどの段階に対応するかをはっきり述べており、これは『論』の別の段に書かれた文章と結合しております。これについては後述いたします。第三に、「二乗不同盡」の「不同」についての解釈は、『論』と差異があります。法上は、「不同」とは四乗に相違があると執着することであり、地前菩薩の位階に当たると考えており、これは後世の教判論では大乘の初級段階に属するものです。以上の三点について、以下、順次詳論を加えたく存じます。

なお、金先生は「ここでの『盡』は、究竟、究極を意味する」とおっしゃっています。金先生のこの説は、チベット訳本の研究成果を参照したのですが、しかし、法上の解釈から考えるに、ここで言う「盡」には「克服・窮盡・超越」といった含意があります。「二乗不同盡」は「不同相

障盡」に直接対応しており、つまり、「不同相障」を超越することであり、この位階の地上菩薩に達し、地前菩薩の辺見を超越するのです。そして、「佛盡」は「體障盡」に対応する等々です。

法上の考え方を分析しやすくするために、次のように表にすることができます。

障名	障因	障果	障位	離障成就	離障階位
同相障	執於多相	不得報身	初地至七地	菩薩盡	八地以上
不同相障	執於別相	不見應身佛	地前	二乘不同盡	初地至七地
體障	多佛解	法身不顯	(説明なし)	佛盡	十地圓滿

また、以下に説明を補います。

同相障——**障因**：多相であるがために同相の障となること（森羅万象の「海會菩薩」がいずれも菩薩の一相であることを理解できていないこと）。——**障果**：功を顕したり智を用いたりせず、報身を成就することができないこと。

離障成就：**菩薩盡**——**離障階位**：八地以上（このために「因道究竟」であると言われる）。

不同相障（「異相障」・「別相障」ともいう）——**障因**：四乗が別のものであると執着すること。声聞乗は菩薩乗とは同じではなく、菩薩乗は仏乗と同じではない等。——**障果**：応身仏を見ることができないこと。

離障成就：**二乘不同盡**——**離障階位**：初地から七地まで。

體障——**障因**：法身（法性身）仏体が唯一であることを理解せず、多くの仏が存在すると考えること。**障果**：法身が顕れないこと。

離障成就：**佛盡**——**離障階位**：十地圓滿。

後世の華嚴宗の人は、『華嚴經』十地品に注釈する際、この「三盡」説について多くの論を展開しました。しかしその説は明らかに『十地經論』を継承しておりますが、法上の影響を受けた痕跡は見られません。例えば、法蔵『探玄記』は、次のように述べています。

初三明有作淨法力……次二句無作淨法力……後三顯身淨力。一、白淨等
是二乘不同盡。二、住廣等是菩薩盡。三、住無礙等是佛盡。

この文章は比較的簡略ではありますが、「二乘不同盡」についての解釈が『十地經論』と同一であることは明らかです。また、澄観の『華嚴經疏』と『演義鈔』の解説は、更に詳細に尽くされています。『華嚴經疏』は次のように述べます。

後三顯身淨力、即三種盡。一、二乘不同盡。謂雙集悲智、離於捨悲入寂過失故。二、菩薩盡。謂離心、意、識、唯依大智法身境故。三者佛盡。無障礙智是佛法故。

故此三盡約人為三。一、自約菩薩。二、出二乘。三、上同佛。

ここでは、二乗の過を「捨悲入寂過」と定義しており、「二乘不同盡」とはこの過失から離れることとされています。このことから、この「不同」はやはり菩薩と二乗とが同じでないことを意味しています。『演義鈔』は更に踏み込んで解釈しています。

今『疏』（『華嚴經疏』）先以『起信』意釋、後用『本論』（『十地經論』）。

続いて、澄観はまず『起信論』に依拠して、本覺隨染の義について大いに語っており、これは澄観の思想が発揮された論述であるのですが、本題と直接の関係がなく、紙幅も限られておりますので、ここでは贅述いたしません。以下は、澄観が「後用『本論』」し、『十地經論』を解釈した文言です。

『疏』從「非心・意・識」下、是『本論』意。『論』具云、「菩薩盡者、法身離心・意・識、唯智依止、如『經』“法身・智身”故」。今『疏』言「非心・意・識之所能得」、即取『論』意反成法身、了心體離念不可得故、說名法身故、慮知集起・思量分別、安能得耶。

ここでは、「菩薩盡」を解説しており、これは『十地經論』に完全に依拠しています。また、以下の「二乘不同盡」についての解釈も、また『十地經論』の思考と同じであり、贅言の必要はないでしょう。

今則金剛藏已出三餘、故涅槃道淨、『經』言“出世善根”者。“根”者即無貪等、既盡所知、超度變易、滿菩薩行、諸度皆圓、常樂我淨、三德皆圓、處而不住、故涅槃道淨。問。“此句‘不同二乘’、義則可爾。上句度於五道、則不同凡夫、何名‘不同二乘’”。……由淨善根故不住涅槃、由度五道故不住生死、合二無住故不同二乘、度於五道入涅槃矣。

これ以降は、繁引しないことにいたします。全体的に言えば、法蔵・澄観等の人による注疏は『十地經論』を直接参考にしており、澄観は更に『起信論』と『十地經論』とをすり合わせていますが、これらは法上の『義疏』とは明確な関連性が見られません。つまり、『義疏』が唐代には既に影響力を全く失っていたことが分かります。

二

金先生のご発表では、『義疏』と『大乘五門実相論』とを比較し、両者の関係をご説明なさっています。『大乘五門実相論』は貴重な写本であり、このような比較に重要な意味があることは、疑いようがありません。そして、その補足として、『義疏』とありふれた經典とを比較することも重要であり、我々が更に深く『義疏』の位置付けと価値について理解するための助けになるかと存じます。

例えば、竺仏念が訳した『十住菩薩断結經』は、やや早期の華嚴類の經典であり、『十地品』と密接な関係があります。この經典は大乗空観から出発し、「菩薩盡」と「無盡」を対比しております。「菩薩盡」はマイナスな偏執の見であり、有相・有限・有功用であり、空観によって対治できるとしています。經文がやや長いので、ここでは詳しく引用しないこととさせていただきます。この經典の中には、「意有解脱門是菩薩盡、無解脱者是謂無盡。意止斷法是菩薩盡、無意斷者所謂無盡。根力覺道是菩薩盡、若無此者所謂無盡」とあり、修行の問題と直接関連付けています。この類の經典を比較研究することにより、「盡」の含意が当時の漢語文献においてどのように変遷したかを知ることができるでしょう。

三

「三盡」の問題に関して、『十地経論』等の典籍もまた呼応して「三盡地」の説を提起しており、その内容はまた豊富で、ここではそれを取り上げて簡単な補足と致します。ただ、紙幅に限りがございますので、「菩薩盡地」のみを取り上げて、例とさせていただきます。

『十地経論』の同じく「加分」の部分は、別の一段の经文（上述の「三盡」の解釈文に対応する经文の上にある）について、次のように解説しています。

八者、菩薩盡入、於第十地中入一切如來祕密智故、如經“得不可思議智境界”故。九者、佛盡入、於一切智入智故。如經“乃至得一切智人・智境界”。

ここでは、「菩薩盡」と「佛盡」の到達する位階について述べています。注目すべきは、「菩薩盡地」の対応する位階が、第十地であることです。北魏の仏陀扇多が訳した『撰大乘論』には、次のようにあります。

無分別智中、解知諸十地、諸菩薩盡至、因三淨身得。⁽³⁾

ここでも、十地の成就（つまり第十地）を「菩薩盡地」としています。『大乘起信論』は次のように述べています。

六者、根本業不相應染、依菩薩盡地得入如來地、能離故。不了一法界義者、從信相應地觀察學斷、入淨心地隨分得離、乃至如來地能究竟離故。

これを、浄影寺の慧遠『起信論義疏』は、以下のように解釈します。

第六業識染。「菩薩盡地」者是第十地、「不了一法義」者是根本無明地也。地前學斷、初地以上離斷、佛地窮盡。

また、これについての法蔵『探玄記』の解釈は次の通りです。

八、十地學窮名菩薩盡入。下「大盡分」中明第十地菩薩入如來十種祕密之智、以祕隱深密難可測知故、名不思議法雲契入、名得彼智力。如『歎淨名』云、「諸佛祕藏、無不得入」⁽⁴⁾、此之謂也。九、究竟位明、因道既圓、

佛果斯剋、窮滿果原、名佛盡入。

澄觀『華嚴經疏』は、この説とほとんど同じです。

八、菩薩盡入。於第十地中、入一切如來祕密智故。即下「大盡分」中、入如來十種祕密之智是也。如來祕密、下地不測、名不思議。若入彼所入、是智之境。入彼能入、即智是境。得即是入故。『歎淨名』云、「諸佛祕藏、無不得入」。九、佛盡入。於一切智入智故。上「一切智」、釋一切智。「入」下「智」字、即智境界。「入」即得也。

これらのことから、諸家はいずれも菩薩盡地を第十地と考えており、これは法上の説とは差異があります。もし両者のつじつまを合わせるならば、法上はおそらく第八地を「菩薩盡」への入り始めと見なしたのであり、一方、諸家が述べていることは「菩薩盡地」の成就であり、つまりそのために第十地と見なされたということになるでしょう。この点については、更なる考察が必要です。

四

「地」が、対治する「障」と関連を有するというのは、仏教においてよく見られる説です。「三盡」から「三盡地」ができたのですから、そこで「三障」に対応するというのは、決して法上の独創的発明ではないでしょう。諸家の依拠した經典が異なるために、用語にも自然に差異が現れるのです。ここでは、法上が何に依拠したのかについて、一、二点ほど論述を試みたく存じます。

第一に、金先生は、「同相障・異相障・體障」という言葉の意味は「智障・煩惱障・體障」に当たるとおっしゃっています。まずは、この説について検討してみましょう。『起信論』には、次のように述べています。

六者、根本業不相應染、依菩薩盡地得入如來地、能離故。不了一法界義者、從信相應地觀察學斷、入淨心地隨分得離、乃至如來地能究竟離故。…又染心義者、名為煩惱礙（煩惱障）、能障真如根本智故。無明義者、名為智礙（智障）、能障世間自然業智故。此義云何。以依染心能見・能現・妄取境界、違平等性故。以一切法常靜無有起相、無明不覺妄與法違故、不能得

隨順世間一切境界種種智故。

すなわち、「煩惱障」は染心から引き起こされて真如根本智を障し、「智障」は無明から引き起こされて世間自然業智を障し、隨順世間一切境界種種智を得ることができないということです。大まかに言えば、これは、地前菩薩と凡小との区別に対応しています。そして、「同相障・異相障」と述べている法上説の重点とは完全に異なります。

私が考えるに、「同相・異相」という術語は『十地經論』に由来しているのですが⁽⁵⁾、しかし、法上の用法は『論』でももとの意味とは違いがあります。『論』は、經典解釈という角度から、文章の全体と該当部分との関連性を説き、そこから更に華嚴宗の法界觀（系統論）に説かれる六相円融について論を展開しています。一方、法上の「同相」は「共相」の一つの分義に近いもので、「異相」は妄執見に当たります。彼の説く「同相」と「異相」との間には何ら有機的関連性が無く、『論』の中でこれら二者が弁証的關係を有していることとは、同列に論じることができません。

第二に、「體障」「菩薩盡」「佛盡」の対応関係において、法上と主流説との間で存在する差異について考えてみましょう。上引のように、淨影寺慧遠・法藏・澄観等の人たちはいずれも、「菩薩盡地」が第十地であるとはっきり述べており⁽⁶⁾、金先生もまた引用している淨影寺慧遠『大乘義章』の一段は、「断体障」が第八地に対応すると説いています。説明の便に供するため、もう一度これを引用いたします。

云何八地、斷除體障。……便舍分別功用之意、舍功用故、行與如等、廣大不動、名入八地。此德成時、名斷體障。云何。八地至如來地、斷除治想。向前八地、斷除體障、治想猶存。故八地云、「此第八地、雖無障想、非無治想、然此治想、八地已上、漸次斷除、至佛乃盡」。

ここでは、断体障と仏盡とが決して対応しないということを述べています。初地から八地まで、徐々に「障想」を断除してゆき、第八地（不動地）になってようやく断じ尽くされるので、「断体障」と呼ばれる。ここではもはや功用を捨てているのだが、ただ「治想」（対治する想法）はまだ残っている。そこで、八地から仏地の間で、なおも徐々に断除してゆ

き、仏地に到ってようやく断じ尽くせるのである、と。要するに、八地は「断体障」「捨功用」した段階であり、しかしまだ「治想」が残っている。また、「仏尽」はこれら三者を全て断じた状態であるべきである。つまり、「断体障」と「仏尽」とは決して対応しない、ということである。また、注目すべきは、これらについて、後世の澄観等の人たちの説は、いずれも慧遠と類似であり、おそらくは彼の影響を受けているのでしょう。ここでは繁引いたしません。

結 語

以上のことから、法上『義疏』における「三盡」と「三障」の議論には、確かに独自の特色があり、それがどのように影響して行ったかについては注目すべきです。金天鶴先生のご発表が、このように重要な切り口を選び取っていらっしゃるの、非常に素晴らしいことです。しかし、金先生がご指摘なさっている通り、『義疏』および他の地論文献については、全面的に詳細に研究を推進することが、まだまだ必要であります。私は、この分野での研究が、南北朝仏教への我々の認識を深化させてくれるであろうことを、確信いたしております。

注

- (1) 金天鶴先生が既にご発表の中で、先行研究について紹介している。
- (2) 『十地経論』の引く経文と六十卷本『華嚴経』や八十卷本『華嚴経』とは、やや違いがある。以下、このことについては注記しない。
- (3) 真谛訳『撰論』の中には、むしろ「菩薩盡地」という言葉が無く、以下に引く、真谛訳と仮託されている『起信論』とは異なる。これにより、真谛が『起信論』の訳者ではないことが確実であると分かる。
- (4) 道液『関中集解』を参照。
- (5) この術語もまた他の経典に見える。ただ、法上『義疏』は『十地経論』を注釈したものであるから、その六相説を採用した可能性が最も考えられる。
- (6) 新羅元暁撰『起信論別記』では、「菩薩盡地者、謂無垢地」と言う。しかし、法蔵『起信論義記』では、「菩薩地盡者、謂十地覺窮、故云盡也」に改めている。

(翻訳担当：平澤 歩)